

ローマ周辺における「シルヴェステルの竜退治」図像 ——ティヴォリ、サン・シルヴェストロ聖堂をめぐる——

伊 藤 怜

Saint Sylvester and the Dragon around Rome: Romanesque Mural Paintings in the Church of San Silvestro in Tivoli

Rei ITO

Abstract

Saint Sylvester was the Pope, the head of the Catholic Church. During his pontificate, the great churches were built in Rome by Emperor Constantine the Great.

The Church of San Silvestro in Tivoli is known for its well-preserved mural painting, dating from the end of the XII century to the beginning of the XIII century. The painting represents the lives of Saint Sylvester and Constantine. One of the scenes depicts Saint Sylvester slaying a dragon. In the text of Life of the saint, his victory over the dragon became extremely important for Christians. This image is said to have worked as a papal political claim during the reign of Pope Innocent III (c. 1160–1216). Though a number of works about Saint Sylvester and the Dragon remain in Rome, Calvi, Ceri, Pisa, Tivoli, and Alatri, they have not been taken into consideration. This paper reconsiders Saint Sylvester and the Dragon in the Church of San Silvestro in Tivoli in comparison with other mural paintings around Rome.

Through examination of original texts about the *Life of Saint Sylvester*, other scenes of the Cycle, other subjects, and a new motif, the paper demonstrates that the Saint Sylvester and the Dragon scene has been connected with the image of *Traditio legis* in the conch in the Church of San Silvestro in Tivoli. *Traditio legis* is the early Christian iconographic motif of Christ distributing his New Law in the form of a scroll to the apostles Peter and Paul. Accordingly, the paper concludes that Saint Sylvester's victory over the dragon and *Traditio legis* were combined and evoked images of Christian victory over harmful effects.

はじめに

シルヴェステル1世は、キリスト教を公認したローマ皇帝コンスタンティヌス1世（在位306-37）の治下、ローマ司教（在位314-335）を務めた人物である。シルヴェステルに関しては、皇帝への洗礼を含めた数々の逸話が『シルヴェステル伝』と『コンスタンティヌスの寄進状（以下、『寄進状』）』によって伝えられ、モザイク、フレスコ画、浮彫、写本挿絵に表されてきた⁽¹⁾。

ラツィオ州、ローマとその周辺の聖堂には、11世紀末から13世紀にかけて制作された聖堂装飾が

数多く現存する。これらの聖堂の壁面はモザイクやフレスコ画で装飾され、創世記、キリスト伝、聖人伝が主題となった。とりわけ12世紀から13世紀にはシルヴェステルとコンスタンティヌス帝のエピソードが繰り返し描かれ、先行研究はこれらの作例とローマ教皇庁の政治的・宗教的政策との関連性を指摘してきた。

ローマ近郊、ティヴォリには、シルヴェステルに献堂されたサン・シルヴェストロ聖堂が建つ⁽²⁾。創建の時期が知られていないものの、現在の聖堂建築は12世紀に遡ると考えられる。同聖堂には、シルヴェステルの生涯を表す説話場面（シルヴェステル

伝サイクル)が4場面展開し、最終場面として「シルヴェステルの竜退治」(以下、「竜退治」)が描かれた(図1)。これまでの研究は、ティヴォリのシルヴェステル伝サイクルと教皇インノケンティウス3世(在位1198-1216)の著作、書簡の内容に類似性を見出し、シルヴェステルとコンスタンティヌス帝の姿を教皇対神聖ローマ皇帝の軋轢の表象ととらえてきた。本論では、ティヴォリの「竜退治」において竜の身に着ける装飾品が「竜退治」では前例のないモチーフであることに着目し、他作例との詳細な比較考察を通じて、ティヴォリにおける「竜退治」の再考を試みたい。

『シルヴェステル伝』と『コンスタンティヌスの寄進状』

シルヴェステル伝サイクルの基本的な典拠は『シルヴェステル伝』と『寄進状』となる。

『シルヴェステル伝』には主に3つのリセンションが伝わり、A版、B版、C版と呼ばれている。レヴィソンはこの聖人伝のA版及びB版の起源を5世紀以降に求めたが、ポールカンブは380年から410年の間にA版の起源を推定し、レヴィソンに異論を唱えた⁽³⁾。これまで、ラテン語写本が約300冊、ギリシア語写本が約90冊、そして多数のシリア語写本が確認された⁽⁴⁾。最古のリセンションとみなされるA版は二巻構成で、一巻目は、シルヴェステルの生い立ちから始まり、キリスト教とユダヤ教の論争の準備をする場面まで、二巻目はユダヤ教祭司12人との論争と竜退治までを記す。B版は一卷構成となり、竜退治の記述にA版と相違点がある。C版はA・B版にシルヴェステルの臨終、埋葬、奇跡に関する加筆がなされ、少なくとも9世紀半ばに成立した⁽⁵⁾。

『寄進状』は、756年のピピンの寄進から、800年のカール大帝戴冠までの間に、ローマの聖職者によって作成された偽書である⁽⁶⁾。この偽書は、前半部(1-10節)のコンスタンティヌス帝のキリスト教への改宗と、後半部(11-20節)の寄進の二部で構成される。『寄進状』は11世紀後半に至るまで、教皇庁で用いられていなかったが、神聖ローマ皇帝と教皇の対立が深まるなか、教皇の世俗的権力を正当化する論拠となった⁽⁷⁾。

『寄進状』に含まれる説話部分は『シルヴェステル伝』に着想を得たため、共通するエピソードもあ

るが、「竜退治」は『シルヴェステル伝』のみが伝える。

ティヴォリ、サン・シルヴェストロ聖堂

ティヴォリはローマから東に約30km離れた都市であり、サン・シルヴェストロ聖堂はその旧市街に位置する。同聖堂はおそらく1100年代に三廊式バシリカとして建てられた後、側廊が取り払われ、単廊式に縮小された⁽⁸⁾。身廊の西端にアプシスと勝利門壁面を備えた内陣があり、内陣内部には祭壇とコンフェッショが残っている⁽⁹⁾。アプシス、勝利門壁面、身廊南北壁面にフレスコ画を有しており、様式や漆喰層の観察からアプシスと勝利門壁面の壁画は同時期の制作とみなすことができる。

アプシス・コンカにはトラディティオ・レギスが描かれ、コンカ下部には、羊の行列、聖母子、洗礼者ヨハネ、福音書記者ヨハネ、旧約聖書の人物像に加えて、シルヴェステル伝サイクルが配される。勝利門壁面の上部には、中央のキリストのメダイオンを両側から、燭台、黙示録の四つの生き物、黙示録の二十四人の長老が囲む。勝利門壁面のスパンドレルには、左側にエリヤの昇天、右側にアブラハムとメルキゼデク、下部には聖人が描かれる(図2)。シルヴェステル伝サイクルは、重い皮膚病に罹患したコンスタンティヌス帝のエピソードから始まり、皇帝の洗礼、ユダヤ教祭司との論争、シルヴェステルが雄牛を生き返らす奇跡、ローマ人を襲う竜を退治するエピソードで終わる。本論の中心となる「竜退治」の詳細については後述する。

サン・シルヴェストロ聖堂の壁画は全体として保存状態も良く、ローマ周辺における貴重な作例の一つであろう。トエスカ以来、ティヴォリの作例は、11世紀末のサン・クレメンテ聖堂壁画と13世紀前半に遡るアナーニ司教座聖堂クリュプタ壁画を結びつける作例と考えられてきた⁽¹⁰⁾。先行研究では、制作年代に関する研究者の見解が一致していなかったが、近年は様式的・図像学的観点に基づいて12世紀末から13世紀前半と推定される⁽¹¹⁾。

マッティエは、シルヴェステル伝サイクルを神聖ローマ皇帝フリードリヒ1世(在位1155-90)によるティヴォリ占領(1157年)と十字軍への出発(1188年)という史実との関係から、1157-70年の間に制作されたとみなし、図像の典拠には『寄進状』を指摘した⁽¹²⁾。

デムスによれば、モニュメンタルな構成、色彩、細部の様式から、ティヴォリの画家はシチリア、モンレアーレなどの壁画装飾に精通しており、ティヴォリの壁画を完成した後、アナーニ司教座聖堂クリュプタで「トランスラティオ聖遺物移動の画家」になったという。また、マッティエ同様にシルヴェステル伝の典拠を『寄進状』と考え、制作年代を1205-10年と提案した⁽¹³⁾。

サン・シルヴェストロ聖堂装飾に関する唯一のモノグラフは、ティヴォリとアナーニの作例が様式的・図像学的に類似することを明らかにした。ランツは、シルヴェステル伝サイクルに教皇インノケンティウス3世が世俗権力に対して教皇権の優位性を読み取り、ティヴォリの制作年代をインノケンティウス3世とホノリウス3世（在位1216-27）の治世期である1210-25年とみなした⁽¹⁴⁾。典拠に『シルヴェステル伝』を指摘したが、各場面に何が描かれていたかという詳細な分析を行っていない。ティヴォリのシルヴェステル伝に描かれた4場面はいずれもキリスト教信仰に関わっており、『寄進状』に認められるような、皇帝権に対する教皇権の優位性を主張する場面は描かれていないため、筆者はシルヴェステル伝サイクルを教皇と皇帝の政治的衝突とみなす見解に同意できない。

ガンドルフォは、マッティエ、ランツによるシルヴェステル伝サイクルの政治的解釈を否定した⁽¹⁵⁾。ティヴォリの壁画は、アナーニの「トランスラティオ聖遺物移動の画家」や在位中のインノケンティウス3世を描くサクロ・スペーコの壁画と比較すると、12世紀前半のティヴォリ司教座聖堂三連祭壇画やティヴォリ近郊カザーペのキリスト板絵に近い。ガンドルフォは12世紀末から13世紀初めを制作年代と定めた。

チェーリ、サンタ・マリア・インマコラータ聖堂のモノグラフにおいて、ツォメリゼはローマ周辺における「竜退治」を概観した。「キリストの代理人」という称号を用いた教皇であるインノケンティウス3世が、シルヴェステル伝サイクルをティヴォリの聖堂に描かせたならば、図像の典拠は『シルヴェステル伝』ではなく、政治的意図と結びついた『寄進状』となったはずであろう⁽¹⁶⁾。ツォメリゼもガンドルフォ同様に、ティヴォリのシルヴェステル伝の主要なテーマが、皇帝に対する教皇権の優位性の主張ではないことを指摘し、ティヴォリの壁画は叙任権闘争後、つまり1122年のヴォルムス協約以後、

1198年にインノケンティウス3世が即位する以前に制作されたと推定する。

近年、マッダーロは、デムスとランツの見解を再び取り上げ、ピサとティヴォリの作例を12世紀末からインノケンティウス3世の治世期とみなした。マッダーロの解釈には、後ほど言及したい⁽¹⁷⁾。

制作年代、典拠、「トランスラティオ聖遺物移動の画家」とティヴォリの画家の関係性が議論の中心であったが、これまで、ティヴォリにおいてシルヴェステル伝がアプシスという聖堂で最も重要な空間に表された点は注目されなかった。シルヴェステル崇敬は中世を通じて広まっていたが、より高まった時期にアプシスに配されたと考えてよいだろう。後述するアラートリの「竜退治」を除いて、アプシス内に配置されたものは伝わっていない⁽¹⁸⁾。それらを踏まえた上で、筆者は壁画の制作年代を12世紀後半から13世紀初めととらえたい。

「シルヴェステルの竜退治」

『シルヴェステル伝』はローマを舞台に展開する聖人伝であり、ローマの歴史・地誌と密接に関連し、ローマの指標となるモニュメントにも言及する。絵画化された「竜退治」においても、『シルヴェステル伝』の版により、竜の洞窟の位置、洞窟の深さ、同行者などの詳細が異なる⁽¹⁹⁾。

シルヴェステルの夢にペテロとパウロが現れ、洞窟に住む竜が猛毒の息を吐き、1千人のローマ人が死んでいると告げた。皇帝の改宗以前は、ウェスタ神殿の巫女は竜に、1ヵ月に一度餌を与えていたが、改宗後、生贄を止めたため竜は毒気を吐き出すようになっていた。異教神官は生贄の再開を求めたが、シルヴェステルはそれに反対し、竜を退治するために洞窟へ降りていく。そしてペテロが彼の前に現れ、竜を従わせる言葉を教える。シルヴェステルは、司祭2人と異教神官2人を従えて洞窟へ下り、竜の口を麻の紐で縛り、それに十字架の印章で封印した。シルヴェステルと司祭は無事であったが、神官は毒気に当てられて気絶し、シルヴェステルによって洞窟の外へと運ばれた。この奇跡によって多数のローマ人はキリスト教へと回心したという。

A版では、シルヴェステルが司祭2人を伴って、150段の階段を下り、ウェスタ神殿近くにある竜の洞窟へたどり着く。このウェスタ神殿は、ポールカンブによればローマ中心地フォルムのウェスタ神殿

と同一である⁽²⁰⁾。12世紀半に記されたローマの巡礼ガイドブック『都市ローマの驚異』も、古代にはウェスタ神殿の地下に竜が住んでいたと伝える⁽²¹⁾。A版の著者はローマが竜の猛毒で危機に陥るきっかけとなった竜について指摘するため、ウェスタ神殿の巫女による竜への生贄について述べた⁽²²⁾。

B版では、シルウェステルが司祭3人と助祭2人を連れて、365段の階段を下り、フォルム同様、ローマ中心地であるカピトリヌス丘の下にある「あたかも冥府であるかのような場所 (quasi ad infernum)」にある竜の洞窟へ向かう⁽²³⁾。A版と異なり、B版では巫女を従えた魔術師が竜に生贄を与えた⁽²⁴⁾。『都市ローマの驚異』以後、竜はフォルムの地下の洞窟に住むと記され、カピトリヌス丘がシルウェステル伝の歴史的・地誌的研究で重要性を帯びるのは19世紀以降である⁽²⁵⁾。

C版の竜退治に関する描写は、B版に依拠しており、差異がない。

ポールカンブは、B版における竜の洞窟と「あたかも冥府であるかのような場所」の記述について考察した。9世紀以降、パラティヌス丘の斜面全体は「冥府 (infernus)」と呼ばれ、『都市ローマの驚異』の著者もパラティヌス丘の辺りを「冥府」と呼んでいた⁽²⁶⁾。また、「竜退治」で最後の審判の日まで閉じ込められる竜は『ヨハネの黙示録』(12: 1-9, 20: 1-3)で天使に1千年間鎖で繋がれた竜と対比される⁽²⁷⁾。くわえて、シルウェステルが洞窟へ下りる行為は、キリストの「冥府降下」を連想させ、シルウェステル伝で洞窟へ下りる際に言及された鉄の扉は「冥府降下」における冥府の扉と共通するモチーフとなる⁽²⁸⁾。シルウェステルと竜の戦いは異教によって危機にさらされたローマを救うための「降下」であり、「冥府降下」に着想を得たと考えられる。

ツォメリゼによると、ウェスタ神殿などの地誌的異教伝承とキリスト教のイメージが混在する『シルウェステル伝』は12世紀のローマでよく知られており、ローマ教会はシルウェステル伝をローマの歴史を語る際に使用していた。新しいキリスト教的コンテクストにおいて、古代ローマの歴史と新しいキリスト教伝承の間に連続性を持たせながら、キリスト教へと変化した社会状況を理解させるために用いられたという⁽²⁹⁾。

作例

ローマ周辺における「竜退治」の最も古い作例は、ローマ、エスクイリヌス丘に建つサンティ・シルヴェストロ・エ・マルティーノ・アイ・モンティ聖堂の壁画断片である(図3)。現在の壁画は損傷が激しく確認できないが、ヴィルペルトの水彩画では、正方形に近い画面左上部に“VBI S(AN)C(TV)S SILVEST(E)R ORE [LIGAT]DRACONE[...]"という銘文が認められる⁽³⁰⁾。画面左には、剃髪、黄色のカズラとパリウムを身にまとったシルウェステルが腕を右に突き出し、竜の口を締める仕種をしているが、シルウェステル右側の竜は色褪せており全体像を確認できない。また画面右には、三角破風、2本の円柱、ニッチを備えた建築物が建つ。背景は上部が青色、下部が茶色に近い色であり、シルウェステルの後方には茶色の箱状のモチーフがある。

同聖堂壁画は、教皇レオ4世(在位847-55)の治世に遡るとみなされたが、アンダローロは教皇ハドリアヌス1世(在位772-95)在位中、778-79年に制作年代を早める提案をした⁽³¹⁾。

ヴィルペルトは同聖堂にシルウェステル伝サイクルが展開し、「竜退治」がその1場面であったととらえた⁽³²⁾。しかし、ローマ周辺にシルウェステル伝サイクルが成立したのは、12世紀以降であった。「竜退治」が11世紀から13世紀に集中して表されたことを考慮すれば、エスクイリヌスの同図像は早い時期に描かれた例外的作例といえるだろう⁽³³⁾。

ポールカンブは画中の建築物がフォルムのウェスタ神殿を表すと判断し、同場面が『シルウェステル伝』A版を参照したとみなした。一方、ツォメリゼは、神殿が円形であり典拠には従っていないが、「冥府」と呼ばれる区域に建っていたサンタ・マリア・アンティクァ聖堂に類似すると述べた⁽³⁴⁾。

ローマ、サン・クリソーゴノ聖堂地下には、初期キリスト教時代のバシリカの遺構が残っており、身廊右壁に断片的な「竜退治」が現存する⁽³⁵⁾(図4)。断片中央、ダルマティカ、カズラ、パリウム、十字架模様のストラを身にまとうシルウェステルは左側の竜の口に両手で紐を巻き付けている。横顔で表された竜は口と目を大きく開き、歯も見せる。竜の左側には画面を区切る円柱、シルウェステルの右側には画面を区切る枠が描かれた。ブレンクによると、身廊右壁に展開した同場面やベネディクトゥス伝な

どの壁画は1051-71年に制作されたが、ローマノは1051-75年頃とみなした³⁶⁾。同場面の左側壁面は失われたため、シルヴェステル伝がサイクルとして存在したか明らかになっていない。

「竜退治」は現在のカンパーニア州カルヴィ、グロッタ・デイ・サンティでも描かれた³⁷⁾ (図5)。グロッタ・デイ・サンティは中世に壁画装飾が施された洞窟である。シルヴェステルは洞窟内4カ所に描かれ、うち3カ所では竜を伴うが、イコン的な正面観で表されている。この竜は、シルヴェステルのアトリビュートとして、また洞窟内の「竜退治」場面を想起させる役割を担ったのだろう。同場面は煉瓦状壁面で分割されている。煉瓦の左側、シルヴェステルは、長い身体をよじる竜の口を紐で締めている。シルヴェステルの右背後には、助祭2人がつき従い、うち1人は冊子本を前方へ持ち上げる。シルヴェステルらと竜は山のように屹立した洞窟の中に描かれ、洞窟の上には祝福を与える仕草のペテロとパウロが胸像で現れる。画面右、煉瓦状壁面には、宝石で飾られた笏を持ち、王冠を戴いたコンスタンティヌス帝が廷臣を引き連れる。

先行研究において、ベルティンクとピアッツァの提案する制作年代の詳細は異なるが、両者とも11世紀後半の制作と推定した³⁸⁾。シルヴェステル伝がサイクルとして表されたのか見解は一致していない。「竜退治」場面下部に、雄牛の奇跡場面を認める見解もあるが、「竜退治」周辺の壁面は損傷が激しく、他の場面の同定は困難となる。

カルヴィでは、ティヴォリや後述するチェーリなどの作例と異なるモチーフが配され、『シルヴェステル伝』を忠実に描き出すことに重点を置いていないようである。ローマのフォルムを示すウエスタ神殿、竜の住処へ下りるための階段は、「竜退治」では重要なモチーフだが、カルヴィには洞窟とレンガ状壁面が描かれ、竜退治がローマのフォルムのウエスタ神殿もしくはカピトリヌス丘付近で起きたことを伝えていない。シルヴェステルに従う助祭2人は通常松明もしくは吊り香炉を持つが、カルヴィの助祭は冊子本をシルヴェステルの背後から竜に向ける。くわえて、カルヴィ以外にコンスタンティヌス帝と廷臣が竜退治と同一場面に配される作例は知られていない。

カルヴィの作例は、ローマ起源の図像がカンパーニアへ伝播したことを示す。モチーフが改変され

たのは、カルヴィ特有の洞窟という環境によると考えられる。ピアッツァによれば、カルヴィに限らず中世を通じて洞窟には悪魔が住むとみなされ、悪魔に対するある種の魔除けとして洞窟内に悪魔と戦う聖人図像が好んで描いたという。画面からローマを示唆する建築物を取り除き、代わりにカルヴィと同じ洞窟モチーフだけを残すことで、画中の洞窟にカルヴィを重ねる効果が生み出されたといえる。ベルティンクによると、助祭の持つ冊子本はペテロがシルヴェステルに伝えた竜を倒す言葉を示唆し、暗闇に包まれた洞窟を明るく照らす神の言葉となり、助祭は松明を持つ必要がなくなる³⁹⁾。画中のペテロとパウロは竜を倒す言葉に加え、シルヴェステルと助祭らに対する守護を表す。

ローマ近郊、チェーリ、サンタ・マリア・インマコラータ聖堂身廊側壁には、複数の聖人伝を4場面描いており、1場面に「竜退治」が認められる⁴⁰⁾ (図6)。画面中央、シルヴェステルは紐で左に立つ竜の口を縛っており、シルヴェステルの右には松明を掲げた2人の司祭エウスタキウスとコンスタンティヌスが付き添う。彼らの背景には、三廊式建築物、続いて右には鉄の扉をもつ建築物と階段、左には竜の洞窟が並ぶ。洞窟の左上ではペテロとパウロがカルヴィのように祝福を与える⁴¹⁾。画面右端の階段上では、異教神官ポルフィリウスとトルファトゥスが竜の猛毒で倒れている⁴²⁾。

チェーリの背景に描かれた三廊式建築物は、『シルヴェステル伝』A版のフォルムのウエスタ神殿、『都市ローマの驚異』で「冥府」と呼ばれた場所に建つサンタ・マリア・アンティクア聖堂、サンタントーニオ聖堂のいずれかであろうが特定できない。『シルヴェステル伝』B版では竜の洞窟をカピトリヌス丘の地下に置いたため、チェーリの「竜退治」がB版ではなくA版に依拠するのは明らかであろう。画中の銘文でもA版で登場する司祭の名前を記したように、チェーリは『シルヴェステル伝』A版を忠実に絵画化したのが、倒れた神官たちは他の作例で表現されないモチーフである。ツォメリゼによれば、ローマを守護する両使徒がローマ教会の代表としてのシルヴェステルと後継者の司祭に付き添ってチェーリの竜退治に現れるのは、ローマ教会が両使徒の下でまとまったことを示す⁴³⁾。典拠では、竜退治以前コンスタンティヌス帝の夢に両使徒が出現するものの、竜退治ではペテロのみがシルヴェス

テルのもとに現れる。チェーリでは、コンスタンティヌス帝の夢に現れる両使徒が竜退治でも繰り返し返されたともとらえられる。

チェーリにおいて、ローマ教会の代表としてシルウェステルは異教信仰と反キリストの象徴である竜を打ち負かす。竜の猛毒に倒れ、シルウェステルに救われる神官を新しいモチーフとして「竜退治」に挿入したことで、異教の敗北とシルウェステルの勝利がより強調されたと考えられる。

ピサ、サン・シルヴェストロ聖堂扉口楣にはシルウェステル伝サイクルの浮彫が展開していた（図7）。現存作例において、ピサの浮彫は典拠『シルウェステル伝』を最も忠実に図像化した作例といえる。ここでは、上段左から右にかけて「幼児の捕獲」、「コンスタンティヌス帝に慈悲を請う母親」、「コンスタンティヌス帝の夢」、「シルウェステルとコンスタンティヌス帝」、「ソラクテ山のシルウェステル」、「シルウェステルをローマへ連れて行く使者たち」、下段左から「使徒ペテロとパウロのイコンをコンスタンティヌス帝に見せるシルウェステル」、「コンスタンティヌス帝の洗礼」、「ユダヤ教祭司たちとの論争」、「雄牛の奇跡」、「竜退治」が表現された。「竜退治」では、楣の右端に竜が配され、その左にシルウェステルが立つ。シルウェステルと竜の頭部、シルウェステルの腕が欠けているが、ティヴォリのように、竜の首は上方で大きく曲げ、頭部を下にしている。

ピサの場合、浮彫であるため、各場面を構成するモチーフが省略され、「竜退治」に同行する助祭、神官、ウエスタ神殿などの地誌的モチーフは一切ない。マッダーロは、ピサとティヴォリの作例が12世紀末に制作され、12世紀末から教皇ボニファティウス8世（在位1294-1303）治世期にかけて高まった反ユダヤ主義論争が反映したとみなす⁴⁴。マッダーロは詳細を記していないが、ピサとティヴォリのサイクルで「ユダヤ教祭司との論争」と「竜退治」が大部分を占めたため、このような見解に至ったのだろう。しかし、典拠『シルウェステル伝』A版二巻の大部分が「論争」と「竜退治」について記していたので、ピサとティヴォリの作例が両場面を詳しく描いたとも考えられる。

ローマの司教座聖堂であるサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ聖堂東側柱廊^{ボルティコ}にはモザイクが施されていた⁴⁵（図8）。これらのモザイクは現存しな

いが、17世紀末の水彩画とスケッチにより伝わる。モザイクの制作年代は、1188-98年とみなされる。水彩画とスケッチによれば、「4隻の船」、「エルサレム包囲」、「コンスタンティヌス帝の寄進」、「コンスタンティヌス帝の洗礼」、「洗礼者ヨハネの斬首」、「竜退治」、「福音書記者ヨハネの殉教」が表された。「竜退治」の画面左側、教皇のパリウムを身にまとい、ミトラを被ったシルウェステルは右側の巨大な竜の口を紐で縛っている。シルウェステルの左背後では、助祭1人が十字架と吊り香炉を持つ。

柱廊に洗礼者ヨハネ、福音書記者ヨハネが描かれたのは、ラテラーノ聖堂が所有していた重要なヨハネらの聖遺物を称えるためであり、「寄進」場面は同聖堂が皇帝によって創建されたことを明示したという。くわえて、ローマ教会を率いる教皇（シルウェステル）は新しいモーセであり、コンスタンティヌス帝以来、皇帝に対する優位性を保つことを主張している⁴⁶。

ローマ、サンティ・クアットロ・コロナーティ聖堂サン・シルヴェストロ礼拝堂のシルウェステル伝サイクルにおいても、「竜退治」が描かれたが画面上部を除く大部分が剥落している⁴⁷（図9）。画面中央には、司祭3人と助祭2人が画面左方向を向き、彼らの右側には教皇冠を被ったシルウェステルが立つ。シルウェステルらは頭部から肩までしか残っていないが、シルウェステルの背景には洞窟のようなモチーフがあり、おそらくその中に竜が描かれていたのだろう。5人の聖職者の左には3つの塔と城壁が交互に並んでいる。

教皇インノケンティウス3世の甥・教皇代理ステファノ・コンティが枢機卿の住居を拡大する際、1246年に壁画装飾が施されたと礼拝堂内銘文が伝えている。この時期、教皇インノケンティウス4世（在位1243-54）がリヨン公会議で神聖ローマ皇帝フリードリヒ2世を廃位させ、教皇と皇帝との衝突は一層激しかった。よって、コンティの礼拝堂では、皇帝権に対する教皇権の優位性が『シルウェステル伝』と『寄進状』を典拠としたシルウェステル伝サイクル10場面を用いて主張されたという⁴⁸。『寄進状』では、コンスタンティヌス帝がシルウェステルとその後継者に王冠、フリギウム、衣服、装飾品を与えたところ、シルウェステルは王冠ではなく白いフリギウムを被ったと記す⁴⁹。礼拝堂壁画も『寄進状』に呼応し、シルウェステルは前半部において剃

髪だが、「コンスタンティヌス帝の寄進」後、「馬丁の務め」からフリギウムを被った姿で描かれた⁵⁰。

シルヴェステルが5人を率いているため、シルヴェストロ礼拝堂の「竜退治」の典拠は『シルヴェステル伝』B版であると考えられる。画面上部に塔と城壁が遠景として描かれており、チェーリやティヴォリのようなフォルムのウェスタ神殿、サンタ・マリア・アンティクァ聖堂、サンタントーニオ聖堂などの建築物が認められない。こうした描写から、礼拝堂の竜の洞窟はカピトリヌス丘の地下であったとも考えられるが、大部分が剥落したため、詳細を確認できない状態である。

アラートリのサン・シルヴェストロ聖堂は、11世紀に献堂され、聖堂内には13～15世紀に遡る壁画装飾が残る⁵¹（図10）。部分的な剥落がある「竜退治」は勝利門壁面の右側基部に配される。画面中央、剃髪のシルヴェステルは教皇のパリウムを身にまとい、左側の竜の口を紐で締める。シルヴェステルの右には助祭2人が並び、1人は司教杖を携えている。背景は濃紺色で塗られ、建築物は認められない。

先行研究によれば、アラートリの壁画は1200～10年に制作された。サン・シルヴェストロ聖堂の大部分の壁画は剥落し、全体像を確認できないが、マッダーロは、アラートリに「竜退治」だけでなくシルヴェステル伝サイクルが描かれ、ティヴォリの聖堂装飾プログラムを踏襲する装飾プログラムが展開したと考えた⁵²。たしかに、アプシスに表されたティヴォリの「竜退治」と勝利門壁面に描かれたアラートリの作例には、図像配置という点で影響もあり得るが、「竜退治」はシルヴェステル伝の中でも頻りに単独で表されたエピソードであった。「竜退治」場面の存在から、アラートリにシルヴェステル伝サイクルが展開したと想定するマッダーロに筆者は同意しない。

ローマ周辺における「シルヴェステルの竜退治」を概観してきたが、ここでティヴォリ、サン・シルヴェストロ聖堂の作例を取り上げたい（図1）。画面中央、剃髪のシルヴェステルは教皇の衣服を身にまとい、右側に立つ竜の口を十字架の封印がついた紐で縛る。シルヴェステルの左に助祭2人が松明と吊り香炉を持って付き添っており、彼らの背景にはアプシスを備えた大きな建築物がある。続いて、シルヴェステルと竜の背後には両側に2本の円柱が

立った階段、竜の洞窟を示唆する建築物が並ぶ。竜は洞窟の中で長い首を曲げて眼を閉じながら、かぎ爪を前方へ突き出しており、防御するようである。前述の作例群とティヴォリの作例を比較すると、いくつかの特徴が明らかになる。①「竜退治」はシルヴェステル伝サイクルの1場面である。②シルヴェステル伝サイクルが左から右へ進むため、竜の洞窟は、ピサの浮彫同様に画面左側から右側へ移動する。③竜は灰色がかったエプロン状のものを胴体に巻く。④階段の両側にある円柱の上に渦巻き状のモチーフが描かれる。⑤チェーリのように、洞窟へ行くための建物に鉄の扉が描かれていない。⑥銘文は記されていない。⑦使徒ペテロとパウロが描かれていない。

ティヴォリの建築物の描写から、「竜退治」が起きたのは『シルヴェステル伝』A版のフォルムのウェスタ神殿、『都市ローマの驚異』で「冥府」と呼ばれた場所に建つサンタ・マリア・アンティクァ聖堂、サンタントーニオ聖堂のいずれかであると考えられるが、チェーリ同様、画中に特定する要素は描かれていない。シルヴェステルに付き添う助祭が2人であること、建築物の描写を考慮すると、ティヴォリの「竜退治」が『シルヴェステル伝』A版を典拠にしたのは明白であろう。

「竜退治」の2人の助祭が「コンスタンティヌス帝の洗礼」、「論争」、「雄牛の奇跡」においてシルヴェステルの傍らに立つ助祭と外見が酷似することに、注目したい。助祭らは、剃髪であるが、1人は縮れ毛でもう一人は丸みを帯びた髪型であり、描き分けられている。ランツはシルヴェステルら3人を3場面配したことについて典礼的要素を指摘したが、ティヴォリの助祭らは単なる助祭ではなく、シルヴェステルの後継者たちであり、シルヴェステルら3人は「ローマ教会」の表象とも考えられる⁵³。カルヴィ、チェーリでは、「竜退治」に使徒ペテロとパウロが表され、ローマを守護する両使徒が「ローマ教会」を示唆するシルヴェステルと後継者の司祭に付き添っていた。ティヴォリの「竜退治」に両使徒は描かれませんが、シルヴェステル伝の上部、アプシス・コンカにはトラディティオ・レギスという、キリストが使徒ペテロに法を授与し、使徒パウロがそれを称揚する図像が配される⁵⁴。トラディティオ・レギス図像はカルヴィとチェーリにおける両使徒と同様の機能を担い、両使徒、シルヴェ

ステル、後継者らがキリストの下でつながり、シルウェステルらは正統な後継者とみなされる。

先行研究において、13世紀初頭にはシトー会やドミニコ会修道士による異端との討論会が行われており、ティヴォリやその他のシルウェステル伝サイクルの「論争」場面に反映した可能性、ピサとティヴォリのサイクルにおける反ユダヤ主義が指摘されていた⁶⁵⁾。筆者がティヴォリの「論争」場面を詳細に観察したところ、ティヴォリの竜は、灰色がかかったエプロン状のものを胴体に巻き付けている（図11）。このようなモチーフは、比較作例に認められず、先行研究でも言及がなされていない。このエプロン状モチーフが何かの象徴であるならば、ティヴォリの壁画が描かれた時代の竜の表象を知る手がかりとなるだろう。竜の身に着けたモチーフは、母ヘレナを先頭としたユダヤ教祭司集団の1人が腰に巻く服飾品と共通するが、何のモチーフかは明らかになっていない。このモチーフから、ティヴォリの竜がユダヤ教祭司を象徴とみなすこともできるが、ティヴォリの「竜退治」を反ユダヤ主義的図像みなすのは性急だろう。同サイクルは、特定の相手（神聖ローマ皇帝、異端、ユダヤ教など）に対する勝利よりも、キリスト、ペテロ、パウロの助けによって奇跡を起こし、キリスト教に反する全てのものに勝利するシルウェステルを描き出したと考えられる。

おわりに

「シルウェステルの竜退治」は、皇帝権に対する教皇権の優位性をアピールするための図像とみなされていたが、典拠の『シルウェステル伝』はローマを舞台にした聖人伝であり、各場面がローマでよく知られたモニュメントと結び付くことを忘れてはならない。「シルウェステルの竜退治」にはローマのカピトリヌス丘、古代異教のヴェスタ神殿、中心地フォルムで「冥府」と呼ばれる場所に建つサンタ・マリア・アンティクァ聖堂などを画中に表す作例も認められ、古代異教ローマとキリスト教モチーフが壁画に混在する。

『シルウェステル伝』のリセンションの違い、周囲に配された図像、挿入されたモチーフとの関係から、図像を読み解いた結果、キリスト、使徒ペテロ、使徒パウロが同じ聖堂内、もしくは画中に描かれたティヴォリ、カルヴィ、チェーリの「シルウェ

ステルの竜退治」は、神聖ローマ皇帝、異端、ユダヤ教に対するローマ教皇の優位性を示すという政治的プロパガンダよりも、むしろ、キリスト、使徒ペテロ、使徒パウロに導かれたシルウェステルの勝利を想起させる役割を担う。

注

- (1) W. Levison, “Konstantinische Schenkung und Silvester-Legende”, in *Studi e Testi*, (Miscellanea F. Ehrle), 38 (1924), pp.159-247; H. Fuhrmann, *Das Constitutum Constantini (Fontes iuris Germanici antiqui in usum scholarum ex Monumentis Germaniae historicis separatim editi, X)*, Hannover, 1968; W. Pohlkamp, “Tradition und Topographie: Papst Silvester I (314-335) und der Drache vom Forum Romanum”, in *Römische Quartalschrift für Altertumskunde und für Kirchengeschichte*, 78 (1983), pp.1-100; T. Canella, *Gli Actus Silvestri: Genesi di una leggenda su Costantino Imperatore*, Università degli Studi di Roma, Tesi di Dottorato di Ricerca in Storia Religiosa Anno Accademico 2001-2003.
- (2) H. Lanz, *Die romanischen Wandmalereien von San Silvestro in Tivoli. Ein römisches Apsisprogramm der Zeit Innozenz III*, Bern, 1983; G. Matthiae, *Pittura romana del Medioevo: sec. XI-XIV*, aggiornamento scientifico e bibliografico di F. Gandolfo, Roma, 1988, pp.86-93, 277-279; E. Parlato, S. Romano, *Roma e Lazio: il romanico*, Milano, 2001, pp.226-232.
- (3) Levison, art.cit., p.211; Pohlkamp, art.cit., pp.40, 89, n.299.
- (4) Canella, op.cit., pp.10-13; Pohlkamp, art.cit., p.63.
- (5) Canella, op.cit., pp.11, 13, n.28; F. Mombritius, *Sanctuarium seu Vitae sanctorum collecta ex codicibus mss*, mediolani ca. 1475, 2, Paris, 1910, pp.508-531.
- (6) Fuhrmann, op.cit.; 宮松浩憲「コンスタンティヌス帝の寄進状」, 『久留米大学産業経済研究』48-1, (2007), pp.95-116.
- (7) N. M. Zchomelidse, *Santa Maria Immacolata in Ceri: pittura sacra al tempo della riforma gregoriana*, Roma, 1996, p.129.
- (8) サン・シルヴェストロ聖堂の建築はローマにおける12世紀の聖堂建築（サン・クレメンテ聖堂、サンティ・クアットロ・コロナーティ聖堂他）と外壁やファサード部分が類似する。
- (9) コンフェッショとは殉教者の遺体や聖遺物を安置する祭壇の地下に設置された小さな墓室である。
- (10) P. Toesca, *Il Medioevo*, Torino, 1927, p.72.
- (11) Lanz, op.cit., pp.23-36.
- (12) マッティエは、ローマのサンタ・クローチェ・イン・ジェルザレンメ聖堂とサン・ジョヴァンニ・ア・ポルタ・ラティーナ聖堂、マルチェッリーナのサンタ・マリア・イン・モンテ・ドミニチ聖堂を論じた。Matthiae, op.cit., pp.86-93.
- (13) O. Demus, *Romanesque Mural Painting*, London, 1970, p.303.
- (14) インノケンティウス3世によるシルウェステルの説教、ドイツ選帝侯宛書簡は以下を参照。Lanz, op.cit., pp.54-55;

- F. Kempf, *Papsttum und Kaisertum bei Innozenz III*, Roma, 1954, pp.194-279.
- (15) Matthiae, *op.cit.*, pp.277-279.
- (16) Zchomelidse, *op.cit.*, pp.119-126.
- (17) S. Maddalo, “Immagini e ideologia tra gli “Actus Sylvestri” e il “Constitutum Constantini”; riflessioni su una duplice tradizione figurativa”, in *Medioevo: arte e storia*, Milano, 2008, pp.481-494.
- (18) Idem, “Una leggenda in immagine. Un episodio delle storie di Silvestro negli affreschi della chiesa di San Silvestro ad Alatri”, in *Tempi e forme dell'arte*, Foggia, 2011, pp.115-121.
- (19) L. Duchesne, “S. Maria Antiqua. Notes sur la topographie de Rome au moyen-âge, VIII”, in *Mélanges d'archéologie et d'histoire* T.17 (1897), pp.13-37; Pohlkamp, art.cit.; Zchomelidse, *op.cit.*
- (20) Pohlkamp, art.cit., p.11; Zchomelidse, *op.cit.*, p.111.
- (21) Pohlkamp, art.cit., pp.13-14; R. Valentini, G. Zucchetti, *Codice topografico della città di Roma, Roma*, 1946, pp.3-65, esp.p.56.
- (22) Zchomelidse, *op.cit.*, p.111.
- (23) Levison, art.cit., p.197.
- (24) Pohlkamp, art.cit., pp.46-47.
- (25) Pohlkamp, art.cit., p.48.
- (26) Ibid., p.51.
- (27) Ibid., pp.41-43.
- (28) Ibid., pp.43, 88-89, n.292.
- (29) Zchomelidse, *op.cit.*, pp.113-114.
- (30) J. Wilpert, *Die römischen Mosaiken und Malereien der kirchlichen Bauten vom IV. bis XIII. Jahrhundert*, 4, Freiburg in Breisgau, 1924, tav.209; Pohlkamp, art.cit., p.49, n.331. 銘文は「聖シルヴェステルが竜の口を縛ったところ（筆者試訳）」と記される。
- (31) M. Andaloro(ed.), *La pittura medievale a Roma 312-1431: Atlante. Percorsi visivi*, 1, Milano, 2006, pp.253-268.
- (32) Wilpert, *op.cit.*, 2, 1916, p.1007.
- (33) S. Piazza, “La Grotta dei Santi a Calvi le sue pitture”, in *Rivista dell'Istituto Nazionale d'Archeologia e Storia dell'Arte*, 57 (2002), p.204.
- (34) Pohlkamp, art.cit., p.49; Valentini-Zucchetti, *op.cit.*, p.56(1).
- (35) 加藤磨珠枝『ローマのサン・クリソゴノ聖堂壁画—初期中世における殉教聖人像の研究—』, 東京藝術大学美術学部西洋美術史研究室, 2001, p.9.
- (36) B. Brenk, “Die Benediktsszene in S. Crisogono und Montecassino”, in *Arte Medievale*, 2 (1985), pp.57-65; Parlato-Romano, *op.cit.*, pp.53-59.
- (37) H. Belting, *Studien zur Beneventanischen Malerei*, Wiesbaden, 1968; Zchomelidse, *op.cit.*, p.116; Piazza, art.cit., pp.169-208.
- (38) Belting, *op.cit.*, p.110; Piazza, art.cit., p.196.
- (39) Belting, *op.cit.*, p.107.
- (40) A. Cadei, “S. Maria immacolata di Ceri e i suoi affreschi medioevali”, in *Storia dell'arte*, 44 (1982), pp.13-29; Matthiae, *op.cit.*, 1988, pp.256; N.M. Zchomelidse, “Tradition and Innovation in Rome and Ceri around 1100”, in *Römisches Jahrbuch der Bibliotheca Herziana*, 30 (1995), pp.7-26; Idem, *op.cit.*, 1996; Parlato-Romano, *op.cit.*, pp.159-165.
- (41) S. PETRVS と銘文が記されているが、パウロの名前は確認できない。
- (42) PO[RIFIRI]VS ET TO[RQVAT]VS と銘文が認められる。
- (43) Zchomelidse, *op.cit.*, p.128.
- (44) Ibid., p.486.
- (45) S. Romano(ed.), *La pittura medievale a Roma 312-1431: Corpus, 4, Riforma e Tradizione 1050-1198*, Milano, 2006, pp.372-374.
- (46) Ibid., pp.372-374.
- (47) Lanz, *op.cit.*, p.107.
- (48) S. Romano(ed.), *La pittura medievale a Roma 312-1431: Corpus, 5:Il Duecento e la cultura gotica*, Milano, 2012, pp.191-208.
- (49) 宮松, 前掲論文, p.113.
- (50) Maddalo, art.cit., 2008.
- (51) Piazza, art.cit., p.204; Maddalo, art.cit., 2011.
- (52) Ibid.
- (53) Lanz, *op.cit.*, p.106.
- (54) トラディティオ・レギス図像は、キリストが、ペテロに開かれた巻物（法）を手渡し、パウロがそれを賞揚する図像であり、4世紀後半からローマ及びその周辺でのみ現れた。M. Rasmussen, “Traditio Legis?”, in *Cahiers Archéologiques*, 47 (1997), pp.5-37; Idem, “Traditio legis-Bedeutung und Kontext”, in *Acta Hyperborean. Danish Studies in Classical Archaeology*, 8 (2001), pp.21-52; B. Snelders, “The Traditio Legis on Early Christian Sarcophagi”, in *Antiquité Tardive*, 13 (2005), pp.321-33.
- (55) 浅野ひとみ『スペイン・ロマネスク彫刻研究：サンティアゴ巡礼の時代と美術』, 九州大学出版会, 2003年, p.182, n.36.

図版出典

図1, 2, 4, 6, 9, 11 : 筆者撮影

図3 : J. Wilpert, *Die römischen Mosaiken und Malereien der kirchlichen Bauten vom IV. bis XIII. Jahrhundert*, 4vols, Freiburg in Breisgau, 1924

図5 : S. Piazza, *Pittura rupestre medievale: Lazio e Campania settentrionale (secoli VI-XIII)*, Roma, 2006

図7 : S. Maddalo, “Immagini e ideologia tra gli “Actus Sylvestri” e il “Constitutum Constantini”; riflessioni su una duplice tradizione figurativa”, in *Medioevo: arte e storia*, Milano, 2008, pp.481-494.

図8 : S. Romano, (ed.) *La pittura medievale a Roma 312-1431: Corpus, 4, Riforma e Tradizione 1050-1198*, Roma, 2006.

図10 : S. Maddalo, Una leggenda in immagine: un episodio delle storie di silvestro negli affreschi della chiesa di San Silvestro ad Alatri, in *Tempi e forme dell'arte*, Foggia, 2011, pp.115-121.



図1 ティヴォリ、サン・シルヴェストロ聖堂 アプシス下部「シルヴェステルの竜退治」



図2 ティヴォリ、サン・シルヴェストロ聖堂 アプシス



図3 ローマ、サンティ・シルヴェストロ・エ・マルティーノ・アイ・モンティ聖堂 「シルヴェステルの竜退治」



図4 ローマ、サン・クリソーゴノ聖堂身廊右壁
「シルヴェステルの竜退治」



図5 カルヴィ、グロッタ・デイ・サンティ
「シルヴェステルの竜退治」



図6 チェーリ、サンタ・マリア・インマコラータ聖堂



図7 ピサ、サン・シルヴェストロ聖堂扉口楯
ピサ、サン・マッテオ美術館 所蔵

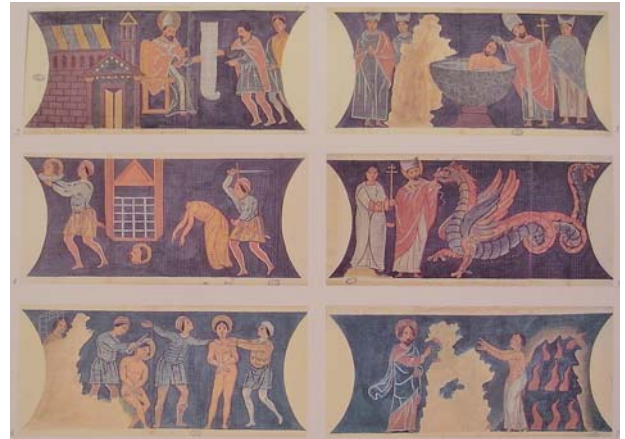


図8 ローマ、サン・ジョヴァンニ聖堂 ポルティコ



図9 ローマ、サンティ・クアットロ・コロナーティ聖堂 サン・シルヴェストロ礼拝堂「シルヴェステルの竜退治」



図10 アラートリ、サン・シルヴェストロ聖堂「シルヴェステルの竜退治」



図11 ティヴォリ、サン・シルヴェストロ聖堂 アプシス下部「論争」(部分)